

勝林寺寺報



わが親我が母だけの救いを願っていた目蓮は、ひとの慈悲といい人間の愛というも、いかに自分本位・利己的なものであるかを悟つたのでした。

真実一人の人を救うには、世々生生の一切の父母がすくわれねばならない。

それにはまずわたしが、念佛していそぎお淨土に往生して、お念佛のおちからであらゆるほとけさまをお供養するなかで、はじめてご縁ふかいわが父母も孝養することができるのだ。

お釈迦さまが祇園精舎にたくさんのお弟子をあつめて安居（あんご）とよばれる長期の研修会を開いておられるその場に、目蓮といふ貴いお坊さんが、顔色変えあわてふためいて相談に駆け込んでまいりました。

目蓮という方は、お釈迦様のお弟子の中でも一番偉い「神通力」にすぐれた人物です。その目蓮さまが、亡くなつた自分の母親の方をたずねたところ、あの優しかった母が、ことあるうちに餓鬼の世界に墮ちていたのでした。

わたしを育てるために母親といふものは、子ゆえの欲望、餓鬼の世界に墮ちていかなければならなかつたのでしょ。目蓮はその母を救つたため食べ物を運ぶのですが、その御馳走も、母の口に入ると忽ち炎となつてかえつて母へ苦しめます。どうしてみようもなくつづき目蓮は、なりふりかまわずお釈迦様に泣きついできたのです。

「お釈迦様、どうしたらこの一人の母を救うことができるのですか？」

お釈迦さま

「目蓮よ、あなた一人の力で、どうなるものではない。かずある天の神々だつてあの母一人を救うことはできないのに。第一、自分の母親だけを救おうなどということは間違つていいはしないか。」

「そうではなくて目蓮よ。一人の母を救おうとするなら、ここに集まつている沢山のお坊さんや修行者を中心としたあらゆる人々に食物、衣類を供養しなさい。そうすれば、あなたの母親だけではなく、七世の父母、あらゆる祖先が、すべて成仏するであろう。」

七月三〇日、出合市場の大石佳奈さまの初参式がありました。父・きょうだい・祖父母おろこびの集い」「歓喜会（かんぎ）」とよんできました。

青丹市場住太郎都

聖武英明治正代

光明淳正和施民

悲智円満大盤石

あおによし（あおやあかに塗られた中国風にかざられた）町並みのすばらしい奈良の都のこの繁栄。

これは聖武帝が知性によつて正しく御代を治めたこと、また光明皇后の淳正（こうじ）（けのないただし）いおきもちから、なごやかに民に慈悲を施していかれたからであつた。このように、智恵と慈悲とが揃うことが、ゆるぎない大石家の繁栄をささえる基礎（大盤石）なのだ。

（市場・佳奈・英明・正代・淳・正和・大石といいました）

八月二十一日	大月	一哉様
八月二十二日	栗尾	政市様



九月のことよみ

小田の田に桑をいつくしみ
ひさしく桑をいつくしみそだてし
まゆかいそだてし
ごとく成れかし
(そのむかし 小田の田に桑を植えて
繭をいつくしみそだてたそのように
どうぞ大切に育成してほしい)

八月十三日、小田の谷垣舞優香ちゃんの初参式がありました。父久司さん母慈さんと祖母さまに伴われてお参りにきた舞優香ちゃんは肥立ちのよい元気な女の子でした。

突然のお参りでしたので、即座の苦吟でありますましたが、お祝いのうたを呈しました。

- | | |
|-----|----------------------------|
| 一日 | 兵庫教区門徒推進員協議会十周年記念研修会（神戸別院） |
| 二日 | 蓮如上人ご動座記念大会（大阪城ホール） |
| 三日 | 同じ |
| 六日 | 和田与八郎氏宅法事 |
| 七日 | 出石組総代研修会（西宗寺） |
| 十日 | 教区調査室会議（神戸別院） |
| 十五日 | 中島彰範氏宅法事 |
| 十六日 | 大月忠男氏宅納骨法要 |
| 二〇日 | 十六夜会定例法座 |
| 二一日 | 住職寺族同朋講座（西宗寺） |
| 二二日 | 宮嶋千秋氏宅法事 |
| 二三日 | 出石組布教大会（正福寺） |
| 二四日 | 秋彼岸会 |
| 二五日 | 同役員会 |
| 二六日 | 出石組連研最終回（勝林寺） |
| 二七日 | 本廟納骨参拝 |
| 二八日 | 出石組連研最終回（勝林寺） |

- | | |
|----------|---------------|
| 二七日 | 本廟納骨参拝 |
| 二八日 | 出石組連研最終回（勝林寺） |
| 坪木隆晴氏宅法事 | |

孫とともに学んだこと

八月十九日。

勝林寺こども研修会は、今年三十一回目だそうです。

そういえばこの孫たちの親がお世話になつたのはもう随分昔のことです。

あのころは一泊か二泊。お風呂にはいって大騒ぎだった。子供について参加したわたしもまだ若かつてなんだか無我夢中でそのころのことあまり覚えていないのです。

ところが今回は孫の付き添い。

前からみると子供の数もずっと少ないし、本堂の隅に座つて子供達のことを静に見守つてやることができました。

そうするなかで、改めて感動させられたこと。



平成9年度
勝林寺こども研修会

それからもう一つ、今回参加の子供は、但東町の子、出石町の子供、八鹿町の子と、別々の村、別々の学校から来ています。その全く平生見知らぬもの同士が、開会式を終わるか終わらぬうちに、ずっと前からの知り合いお友達のように解け合いむつみあつていた姿です。

時代のせいかなとも思いましたが、それはやっぱりお念佛のせいだと思いました。

南無阿弥陀仏のみほとけさまによばれてい、言わば兄弟なのだというそんな気分があつたのかどうか、そこらはわからないまでも、とにかくはたからみていても羨ましいぐらいなおともだち関係ができていたのには、わたくし改めて感動させられたことでございました。

仏教婦人会の方々のご奉仕、ほんとうにありがとうございました。

(子供会付き添いの祖母)

こども研修会
ありがとう

山門・鐘楼建築未状況

平成9年度
勝林寺こども研修会



並日放無量無辺光
無碍無対光炎王

私たち人間の、感覚も考えもまた表現もちのちそのものもなにもかも一切、「かぎりあるもの」です。その「かぎりある」ものどうしが「あれよりもこれが」大きいとか小さいとか、高いとか低いとか比較しあい対立しない競争しあつて生きています。それが人間苦悩の根源です。

そんなちっぽけな「依怙地」な我執に依つてしか生きられない生きとし生ける者に、そのおひかりは、いつでも(無量)、どこで現実のすがたに気づかせ、かつ、それを越え出る力を与えて下さる「光りの如来様」。

そのおひかりは、いつでも(無量)、どこで現実のすがたに気づかせ、かつ、それを越え出る力を与えて下さる「光りの如来様」。

も(無辺)、なにものにも邪魔されず(無碍)、あらゆる対立を越え(無対)、すべての煩惱苦悩を焼き尽くす炎のような願力です。(以下ひかりの十二の力を挙げならべます)



彼岸会

3日
午後2時

今一度「蓮如上人」を讃仰させていただきたいと思います。

是非誘い合ってお参りください。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

同日

午後4時半から

合同役員会

(総代・仏事・佛事役員ご参考下さい)